

ブライアン・ムーア (1921-1999) の描く北アイルランド —カトリシズムとナショナリズムに対する見解を中心に—

八 幡 雅 彦

The Northern Ireland Portrayed by Brian Moore(1921-1999): Moore's View
of Catholicism and Nationalism

Masahiko YAHATA

はじめに

ブライアン・ムーアは北アイルランドが生んだ国際的小説家である。デビュー作の『ジュデイス・ハーン』(1955)から遺作の『奇術師の妻』(1997)まで、彼が1冊の本の形で出版した小説は20編で⁽¹⁾、それらの舞台は世界中に及ぶ。そのうち彼が生まれ故郷の北アイルランドを主な舞台とし、そこに暮らす人々の生き様を主題として描いた小説は、『ジュデイス・ハーン』の他に、2作目の『ルパーカルの饗宴』(1957)、5作目の『アイスクリーム皇帝』(1965)、そしてブッカー賞候補作となった『沈黙の偽り』(1990)の4編である。

筆者はいわゆる「北アイルランド問題」に関心を持っており、近代、現代の北アイルランドの小説家たちがこの問題をどのように描いているか、そしてどのように「融和」、「解決」の方法を示しているかということの研究している。北アイルランド問題は、ひとことで言うならば、北アイルランドのイギリス残留支持派と、アイルランドの南北統一支持派の間で争われている紛争のことで、その起源は今から約830年前、1167年から1171年にかけて、当時のイングランド国王ヘンリー2世が初めてアイルランドに干渉したことによる。そしてイギリス残留支持派は「ユニオニスト」と呼ばれ、その大半はイギ

リスに祖先を持つプロテスタント教徒であり、アイルランド統一支持派は「ナショナリスト」と呼ばれ、その大半はアイルランド島に祖先を持つカトリック教徒である。

筆者はブライアン・ムーアの上記の作品も北アイルランド問題との関わりという観点から読んだ。(ただし『ルパーカルの饗宴』は絶版で、どうしても入手不可能で読むことができなかった。)筆者がこれらの作品を読んで疑問に思ったのは、ムーアは、カトリック・ナショナリストの家庭の出身にもかかわらず、カトリシズム、ナショナリズムを痛烈なまでに批判しているということである。ナショナリズム、すなわち北アイルランドのイギリスからの独立、アイルランドの南北統一支持が世界的な見解のように思えるが、筆者は、アイルランドの歴史の研究を通して、そしてムーアの小説を読むことを通して、ユニオニズム、すなわち北アイルランドのイギリス残留支持にもナショナリズム同様の正当性があるのではないかという思いに至った。

拙稿では、主としてムーアの上記3作の分析とアイルランド史への言及を通してユニオニズム、ナショナリズム双方の正当性を論じるとともに、欧米ではほとんどの作品がペーパーバックで出版され幅広く読まれているが、日本ではあまり読まれていないムーアの小説の価値を示したい⁽²⁾。

『アイスクリーム皇帝』におけるナショナリズム批判

ブライアン・ムーアの父方の祖母は、1798年のユナイティッド・アイリッシュメン蜂起で反乱軍側に加担して戦ったオロー (O'Rawe) という古くからのカトリックの家庭出身だったが、祖父はもともとプロテスタントの一派であるプレスビテリアンの家庭出身だった。しかしこの祖父は、理由は定かではないが、カトリックに改宗し、その息子ジェイムズ、すなわちムーアの父親は、改宗者にありがちな「一途な献身」と「断固たる決意」を受け継いだ⁽³⁾。そしてジェイムズが結婚したのは「アイルランド人のうちでも最もアイルランド的」⁽⁴⁾というべき人々が住むアイルランド西部ダニゴール州の貧しい農家出身の娘だった。ジェイムズのカトリシズム、ナショナリズムに対する傾倒をさらに深めたのが、彼の通ったベルファーストのカトリックの名門校セント・マラキー・カレッジでのイーオイン・マックニールとの出会いだった。彼らの友情は、マックニールが1898年にジェイムズの姉アグネスと結婚することによりさらに深まった。マックニールはアイルランドの中世に関する歴史学者でもあったが、1890年代初頭にはゲーリック・リーグの創設者のひとりとしてすでに有名になっており、アイルランドのイギリスからの完全独立を目論むナショナリストの革命運動組織の結成に係わり、後にはアイルランド義勇軍の指導者ともなった⁽⁵⁾。セント・マラキー・カレッジには奨学金を得て通う優等生であったジェイムズは、卒業試験で書いたエッセイが全アイルランドの最優秀賞に選ばれるほどの文才の持ち主であったが、コーク・クイーンズ大学では文学ではなく医学を専攻し、卒業後はベルファーストに戻って来てカトリックの名門医として名の通ったメイトー病院に外科医として勤務した。ムーアは後年、父親の熱烈なカトリシズム信仰の一端を示すエピソードを紹介している⁽⁶⁾。

ある時、父親は台所の食卓で「オーミュー・

ペーカリー」と包み紙に印刷されたパンを見つけた。困惑した彼は妻を呼び、「ヒューズとケネディーがカトリックのパン屋だろう」と言った。妻が「オーミューの方が安いですもの。それにとってもおいしいと評判ですもの」と答えると、彼は「数ペニー高いくらいかまうもんか。オーミューから買ってはいかん。あれはプロテスタントのパン屋だ」と叱った。

父親は息子ブライアンを自分と同じエリートコースに進ませるべく、セント・マラキー・カレッジに入学させた。父親の文才を受け継いだ彼は、他の生徒たちが四苦八苦している週末の宿題の国語のエッセイを30分で難無く書き上げることができた。したがって週末には5人の同級生から頼まれた5つのエッセイを書き、ひとり6ペンスずつもらうようなことがあった。しかし、彼の学校時代は、後にローズマリー・ハーティルとのインタビューの中で語ったように、決して幸福なものではなかった。

私は昔よく、自分の通う中等学校は「神父製造工場」だと言っていました。それは厳しい学校でした。今もあります。私たちはいつも叩かれていました。私たちは、毎朝、フランス語の不規則動詞が暗記できないとむちで打られました。何か間違えば必ずむちで打られました。毎日手をぶたれるようなもので、来る日も来る日もすべてのものが暗記で教え込まれました。それは最低の人間教育の方法で、私は今思い起こしても憤りを覚えます。この学校は周りがすべてプロテスタントに囲まれていましたので、私たちはプロテスタントの学校よりも良い成績を上げなければなりませんでした。そのために私たちはぶたれ、成績を上げるために詰め込み教育を受け、実際には何ひとつ学びませんでした。私は覚えているのですが、私が初めてフランスに行った時、誰ひとりとして私の話すフランス語を、ひとことたりとも理解してくれませんでした。しかしながら私は不規則動詞は全部知っていました⁽⁷⁾。

さらに1962年、ムーアは別のエッセイの中でこの学校で受けた屈辱的な体罰といじめを紹介し、その因習的カトリシズムを糾弾している。

14歳の時、私たちは将来の夢についてエッセイを書く宿題を出された。私は夜を徹して書いた。私は生まれて初めて気持ちが奮い立った。私は偉大な詩人になると書いた……このエッセイを英語の先生に提出したら、翌日、彼は私の机にやって来て、煙草でやにだらけの親指と人差し指で私の耳をつかみ、私を教室の前に引きずり出し、私は声を出してエッセイを読むよう命ぜられた……抑圧された少年たちが楽しみを得るために、私は何という格好の餌食だったことか！

しかしこの先生はもうこの世にいない。彼が私を自分の慰みのためのせむし男のように扱ったことで、私はもはや彼を憎むことはできない。また、クラスメートたちよ、私は、その日の放課後、君たちが行ったさらに大きな気晴らし故に君たちを憎むこともできない。君たちは覚えているだろう。私が学校の飲用噴水のところに引きずって行かれ、その下に頭を突っ込まれ、水が背中を流れ落ち、ズボンを持って私の骨張った足をしたたり落ち、ソックスと靴がずぶ濡れになった時、さらに多くの群衆が集まったことを。そして私はずぶ濡れのまま私のエッセイを読むことを強要されたことを⁽⁸⁾。

ムーアをセント・マラキー・カレッジの世界から、そして家庭の世界からさらに遠ざけたのが、アイルランドのナショナリズムとヨーロッパの政治に関する父親との著しい見解の相違だった。当時、父親の友人が発行していたベルファーストのカトリック系新聞『アイリッシュ・ニュース』は、スペイン内乱に関して、カトリックであるフランコ勢力に対する支持を表明した。アイルランドのナショナリストたちは、多くが「カトリック機軸」勢力を支持しており、彼らの政治的見解は「イギリスの困難はアイルランドの好機」という有名なスローガンに示さ

れたように「反イギリス色」で彩られていた。一方、ムーアは、フランコ、ムッソリーニ、ヒットラーらに敵意を示し、したがってアイルランドのナショナリズムに反発した。1967年、彼はハルヴァード・ダーリーとのインタビューの中で次のように語っている。

勿論、私の伯父と父親故にアイルランド問題は私に影響を及ぼしました。しかしそれは彼らの革命であり、私の革命ではありませんでした。私はすべてのナショナリストの熱狂に反発しました。なぜならば、彼らのイギリスに対する憎しみは、ムッソリーニのようなイギリスの敵に対する称賛へと拡大していったからです。そのうえ、私はスペイン内乱の時代に育ちました。私は当時17歳で、ゲイヴィンが彼の父親は間違っていると思ったのと同じように、私は自分の父親は間違っていると思いました⁽⁹⁾。

「ゲイヴィン」とは、『アイスクリーム皇帝』の主人公ゲイヴィン・パークのことである。ムーアがもっとも自叙伝的作品と認めるこの小説は、1939年、第2次世界大戦が始まってムーアの分身であるゲイヴィンがイギリス空軍救急部隊(FAP)へ入隊してから、1941年ベルファーストがナチス・ドイツによる空爆を受けるまでを描き、ムーアのアイルランドのナショナリズムと北アイルランドにおける宗派紛争に対する批判が色濃く表現されている。ムーアがFAPに入隊した理由のひとつは、この小説の中でゲイヴィンの姉キャシーが彼に、「あなたがこの仕事を選んだのは、学校に戻って来て大学入学資格試験にパスするよりも簡単な救急資格試験にパスする方が簡単だと思ったからでしょう」⁽¹⁰⁾と言っているように、ムーアはセント・マラキー・カレッジでは「数学」で落ちこぼれ、大学に入学することができず、行き場がなくなったからだ。しかし、もうひとつの大きな理由は、イギリスの敵国を支持した父親を初めとするナショナリストたちへの反発と、この戦争でアイルランドが取った中立の姿勢に対す

る反発があった。後の1995年、ムーアはアイリーン・バタースパイとのインタビューの中で、「中立は恥です。自分たちは戦争と係わりを持たないから偉大だなどと思って、身を引いている人間たちのことなど考えると胸糞が悪くなります」⁽¹¹⁾と述べている。

ムーアの父親の分身であるゲイヴィンの父親（ムーアは彼に自分の父親と同じジェームズというファースト・ネームを与えている）はキャシーとの会話の中で、ヒトラー支持を明白に表現している。

「ポーランド軍がルブリンで降伏したぞ。ヒトラーが勝ったんだ。勿論彼はもう二、三の要求を出すだろうが、イギリス軍もフランス軍も断れる立場ではない。奴らは軍靴をはいたままで震えている」

「父さん」とキャシー。「そんな話し方してたら逮捕されると思うわ」

「逮捕するがいい」ミスター・パークは堂々と言った。「わしは前にも同じことを言ったし、もう一度言ってやる。少数民族を踏み潰すということに関しては、ドイツ軍の軍靴はジョン・ブルの踵に比べれば半分の堅さもない。ヒトラーが文明の脅威だなどというデタラメ話は全くのイギリスの偽善だ。その事は奴らがやってきたことじゃないか」⁽¹²⁾

そしてムーアは感情をあらわにしてゲイヴィンの父親を批判している。

彼の父親は弁護士で、法律に関する訓練が彼を、物事の判断においては客観的、論理的、理性的にしたと勝手に思い込んでいた。実際のところ、ゲイヴィンは、彼の父親は自分が今までに出会った人間のうちでは最も偏見に満ち、感情的で、非理性的な人間のひとりだと思っていた。父親と議論してもはや何の役にも立たないと彼が心に決めてから1年以上が経っていた。沈黙と、沈黙の反乱が、父親のカトリシズムに関する偽善的たわごと、父親のファシスト的政治趣味、父親の文

学的クーデターに抗するための唯一の防御手段だった。父親の意見は笑うべきものだった。いや、多分、人を泣かせるに十分なものだったろう⁽¹³⁾。

実際にはムーアの父親は医者であったが、彼はゲイヴィンの父親を弁護士に仕立て、弁護士でありながら正しい物事の判断ができないという設定にして、カトリック・ナショナリストたちに対する批判の度合いを強めている。また、父親の「文学的クーデター」というのは、ムーアと父親の文学に関する意見の相違を指している。1967年、ムーアはリチャード・B・セイルとのインタビューにおいて、彼はジェームズ・ジョイスを賞賛したのに対し、父親はジョイスを「下水みぞ」と呼んで軽蔑し、これを機に彼の家庭生活が大きく変わったことを告白している⁽¹⁴⁾。父親がジョイスを嫌った理由は定かではないが、アイルランドを捨て、『ダブリン市民』（1914）等を通して故国の退廃的雰囲気、カトリシズムの保守性を描き続けたせいだろうか。

ムーアがカトリック・ナショナリストを批判するために登場させたもうひとりの人物は、ゲイヴィンがFAPで出会ったミック・ギャラガーという、IRAの温床といわれるフォールズ・ロード出身の男である。ムーアによれば、ここの住民たちは、もしドイツの爆撃機が夜ベルファースト上空に襲来した場合には、家の2階の窓に明かりを灯して敬意を表す準備ができていたという。元IRAメンバーだったギャラガーは、「イギリスの困難はアイルランドの好機」というスローガン信じ、イギリスを倒す勢力として、もはやIRAに希望を捨てヒトラーに賭けていた。彼がイギリス空軍に入隊したのは、ただ単に生計を得るためだった。

一方、ゲイヴィンの家族は父親を初めとして、ドイツがアイルランドを攻撃するなどということは夢想だにしていなかった。父親は、ダブリンがドイツ軍の空爆に会ったという話を聞いた時耳を疑った。伯母のリズは、空爆はドイツと見せかけてイギリスが行ったもので、中立を守

っているアイルランドを戦争で彼らに加担させるための策略に違いないと言った。父親もそう信じた。しかし、それは実際ドイツ軍による空爆で、彼らはずいぶんベルファーストをも空爆にやって来た。ゲイヴィンの父親の期待はずたずに引き裂かれた。ムーアは、ここでもカトリック・ナショナリストへの批判を強調するために、彼自身の父親が実際には行わなかったことをゲイヴィンの父親にさせている。ゲイヴィンの父親は、同行を断ったゲイヴィン以外の家族を引き連れてダブリンに逃げた。しかしムーアの父親はベルファーストを去ることはなかった。車で家を去ろうとしているゲイヴィンの父親に関するムーアの描写は皮肉を極めてい

「また爆弾だ」彼の父親は言った。「ドックの近くのどこかだろう。造船所は修羅場になっているに違いない。ああ、クソ、わたし前にも言ったが、もう一度言ってやる。ドイツ軍の奴らの軍靴はジョン・ブルの奴の踵よりもはるかに残酷な重荷だ」

「父さん、いつそんなこと言った」ゲイヴィンは尋ねた。「父さん、そんなこと一度だと言って言ったことないよ」

しかし父親は彼を無視して、顔を背け、車輪のところにいるキャシーの方を見た¹⁵⁹。

そしてゲイヴィンの父親はこの悲惨極まる空爆の数日後、息子の無事を確認するため、ベルファーストに戻って来た。空爆で破壊された彼の家で息子との間で展開するシーンも、現実にはムーアと彼の父親の間ではなかっただろうとされている。

ロウソクの火で、ゲイヴィンは父親が泣いているのが見えた。彼は今までに父親が泣くのを見たことがなかった。父はこの家が没収されていることを知ったのだろうか。父はすべてのものが変わってしまって、物事は二度と同じではないことを知ったのだろうか。ゲイヴィンの中の新たな声が、冷たい大人の声があった。「いや」彼の父親は今や子供だっ

た。彼の父親の世界は死滅した。彼はラジオの方に目をやると、父親がイギリスの困難を耳を立てて聞いていたのを、また別の遠くでの敗北のニュースを聞いて喜んでいたのを思い出した。そんなことは忘れろ、と大人の声があった……彼の父親は泣いていた。その声がゲイヴィンに何をすべきか教えてくれるだろう。これから先、彼はそれらの事を知るだろう。

彼の父親はこの変化に気づいているようであった。彼は、整えていない白髪をゲイヴィンの肩に寄せ、うなずき、泣きながら、確信したように言った。「ああ、ゲイヴィン」と父親。「わしは馬鹿だった。本当に馬鹿だった」

新たな声が沈黙を指図した。彼は父親の手を取った¹⁶⁰。

これは、ゲイヴィンの父親が自分のヒットラー支持がどんな恐ろしい間違いであったか、そしてアイルランドのナショナリズムがいかに偽善的であったかを確認する描写だが、実際にムーアの父親がその思いに至ったかどうかは定かでない。ムーアは、この小説出版の翌年の1966年、ローリー・フィッツパトリックに宛てた手紙の中で、この作品の意図はビルディングスロマンであったと述べている。

あれらの恐ろしい夜の出来事は、私の青年主人公を成長させただけではなかった。アルスターをも成長させた。ここでのちっぽけな戦争、例えば7月12日の行進や、窓を割ったり、石をぶついたりするちっぽけな憎み合いがどんなに幼稚で愚かに見えたことか。ドイツが勝って欲しいというナショナリストたちの密かな願いは、実際その通りだったのだが、恐ろしく子供じみた自己欺瞞のように思えた。ローマとローマ教皇をアルスターの敵と見なすオレンジ協会の連中の雄弁術と同じくらい愚かに思えた。小説の最後で、主人公のゲイヴィンは彼の父親の愚かで頑なな信仰を許す。彼の父親は、自分がどんなに愚かだっ

たかを悟って泣く。私の意図はただ単なる「ハッピー・エンド」ではなかった。私は当時のアルスターで起きたと思っていることを書いた。われわれは皆成長したということを書いた。⁽¹⁷⁾

筆者はここでムーアに反論したい。彼が北アイルランドにおける宗派紛争をドイツのベルファースト空爆と比べて「ちっぽけな戦争」と述べている点に関してである。確かに、彼がこの小説の中で描写している通り、ドイツ軍の空爆は悲惨極まるもので、規模的には北アイルランドの宗派紛争をはるかに上回るものであった。しかし、ドイツとイギリスの反目は第2次世界大戦後終息し、今では友好国同士であるのに対し、北アイルランド紛争は、前述した通り、約830年に亙る怨念の歴史を持ち、未だ終わる気配を見せていない。そして、この空爆を通して北アイルランドは成長したというムーアの楽観論は、その後の歴史を見れば間違いであったことが分かる。北アイルランドの紛争がちっぽけな戦争であるという彼の見方は、『ジュディス・ハーン』の中でも、そしてこの紛争を真正面から描いた『沈黙の偽り』の中でも表現されている。『ジュディス・ハーン』のうちで、ベルファーストからアメリカへ移住し、そして再び里帰りしたジェイムズ・マドゥンが、甥と言いつつ争う場面がある。彼は一部のアイルランド系アメリカ人を愛人呼ばわりして次のように言う。

ミスター・マドゥンはクックッと笑った。「ニューヨークにはあらゆる種類の愛人がいる。例えば、アイルランド系アメリカ人の連中、あいつらはベルファーストに住んでいる奴らと何ら変わりがない。どんな議論の中にもあいつらは必ずアイルランドを引きずり込むんだ。いつも反イギリスのピラを配っているやがる。いいか、ニューヨークでも、その他のどこでも、誰ひとりとして北アイルランドの6州で起きていることなど一すみません、ご婦人方一屁とも思っていないやしない」⁽¹⁸⁾

またムーアは『沈黙の偽り』の主人公マイケル・ディロンにも、「アイルランドが統一しようがしまいが世界の歴史の中では微塵の重要性もない」⁽¹⁹⁾と言わせている。

他の世界紛争と比較した場合の北アイルランド紛争の重要性に関する議論はともかくとして、ムーアは、『アイスクリーム皇帝』の中で、第2次世界大戦という状況下に置かれたベルファーストの住民を描くことにより、当時のアイルランドのナショナリズムの恥部を鮮明にえぐり出し、同時に愚劣な宗派紛争を糾弾していると言えよう。そしてこの作品のもうひとつの価値は、ムーアの優れたナラティブの技法により、ドイツ軍の空爆がベルファースト住民にもたらした犠牲の悲惨さがよりリアルに表現されている点にある。その端的な例が、ゲイヴィンが仲間の救急隊員とともに、積み重なった、悪臭を放つ死体を処理する場面の描写である。救急隊員たちは士気を鼓舞するためにウィスキーを回し飲みする。ゲイヴィンは、ウィスキーの順番を待ちながら死体を見つめていると、彼の視線は、積み重なった死体の底から突き出た、年寄った女性のむきだしの皮膚、硬直した足に注がれた。ここでムーアは、この作品のタイトルの由来ともなったウォーレス・ステイブンスの詩「アイスクリーム皇帝」の一節を挿入する。

If her horny feet protrude, they come
To show how cold she is, and dumb.
Let the lamp affix its beam.
The only emperor is the emperor of ice-cream.⁽²⁰⁾

もし彼女の硬くなった足が突き出ているとしたら、それは彼女がどんなに冷たく、無言であるかを示すためだ。
ランプに光を当てさせよ。
唯一の皇帝はアイスクリーム皇帝だ。

そしてゲイヴィンは仲間の救急隊員から差し出されたウィスキーを飲む。しかしその強いウィスキーは彼の士気を高めるどころか、胃がむ

かつき、前に飲んだ紅茶と一緒に吐いてしまう。ただ単に死体の有り様を述べるのではなく、周囲の人間の反応を示し、主人公の思いを端的に現した詩を効果的に挿入することによって、犠牲者の悲惨さがよりリアルに表現されているといえよう。

『ジュディス・ハーン』におけるカトリシズム批判

学校時代から第2次世界大戦に至るまでの体験を通して、アイルランドの保守的なカトリシズム、偽善的なナショナリズム、愚劣な宗派紛争に嫌悪感を覚えたムーアは故国を去り、作家となることを決意する。そして彼のこの決意を促進したものにジェイムズ・ジョイスからの影響があった。後の1982年、ムーアは『ユリシーズ』(1922)と『若き日の芸術家の肖像』(1916)から受けた当時の影響を次のように回顧している。

私は『ユリシーズ』を家に持ち帰り、自分の部屋に隠した。次の二、三日間、私はこっそりと、時間をかけて、興奮を味わいながら読んだ。その中には私が理解できないものが多くあった。しかし、それは私がかつて読んだ他のいかなるアイルランドの(あるいはイギリスの)小説とも驚くほど異なるものだった……

初めて読んだ時から、『ユリシーズ』は、私の人生とは言わないまでも、作家になるうえで私の考えを変えた。それは私を奮い立たせると同時に、私に脅威を与えた。そのおかげで私は『若き日の芸術家の肖像』を読むに至った。それは、アイルランドのビルディングスロマンの真髄で、見事な、非の打ちどころのない作品で、私の同世代人同様、私にとってまさに「われわれの」本となった⁽²¹⁾。

1948年、カナダのモントリオールに移住したムーアは、新聞記者を務めるかたわら、金儲けのために書いた二、三のスリラー小説の著者と

してある程度名声を得る。しかし、それに飽き足らず、真の小説家としての名声を目指し、1953年初頭から着手し1955年5月に出版したのが『ジュディス・ハーン』で、「作家クラブ・デビュー小説賞」に輝く成功作となった。そして彼が、「私が新聞記者の仕事辞め、ケベックのローレンティアン山脈の山荘に隠遁し最初の小説を書いた時、私は再びジョイスを模範とすることを選んだ」⁽²²⁾と後に述べているように、この作品にはジョイスからの影響が色濃く現れている。1998年にデニス・サンプソン(彼もムーアと同じようにアイルランドからカナダに移住した)が出版した『ブライアン・ムーア―カメレオン小説家―』は、今までに出版されたムーアの評伝のうちでは最も優れたものとの評判が高い。その中で彼もまた、アーネスト・ヘミングウェイやメイヴィス・ギャラントといった他の作家に比べて、ジョイスがムーアに与えた影響の大きさを強調する。

しかし最終的にムーアの初期小説の模範となったのは、ヘミングウェイやギャラントが描いたヨーロッパの異邦人世界ではなく、『ダブリン市民』と『ユリシーズ』においてジョイスが見せたアイルランド体験の本質に迫る手法だった。「午後のライオン」のようなモントリオールの物語でさえも『ダブリン市民』とレオポルド・ブルームの特徴を備えている。中心登場人物は都会の孤独人、非同情的な社会から慰めや愛を求めようとする些細な人間たちである。⁽²³⁾

ムーアが『ジュディス・ハーン』のうちで描いた「都会の孤独人」は、タイトルと同名の、ベルファーストに住む40歳を過ぎた独身女性である。後の1985年、ムーアはトム・アディアとのインタビューにおいて、ジュディス・ハーンはメアリー・ジュディス・キーオウという、かつて彼の家によく出入りしていた実在の女性がモデルであったことを認めているが⁽²⁴⁾、同時に彼はこの小説を書くに当たって、ジョイスの『ダブリン市民』のうちの「痛ましい事件」⁽²⁵⁾を意識していたのではないだろうか。この作品

の主人公はジェイムズ・ダフィーという、意図的に他人との接触を避けて、ダブリン郊外で孤独に暮らす男性である。彼はふとした事から人妻と知り合う。彼女は、裕福とはいえ、決して家庭生活は満たされていなかった。ともに「都会の孤独人」であるふたりは、妙に意気投合し、逢瀬を繰り返すようになる。ある時、ふたりの感情が高じて、彼女は思わずダフィーの手を取って自分の顔に当てる。驚いたダフィーは手を引き、数日後彼女に別れを告げる。それ以後ふたりが出会うことはなかったが、それから4年後のある日、ダフィーが新聞に目を通していると、彼女が列車にはねられて死亡したという記事が目に入る。彼女は彼と別れた後酒浸りになり、この事故は酒を飲んで彼女の安全未確認が原因だった。この痛ましい事件を知ってダフィーはますます孤独感を深め、物語は終わる。

一方のジュディス・ハーンは、両親を亡くし、そして骨の髄までカトリック教徒だった伯母の病気の、気が滅入るような看病をし、その伯母も亡くなり、今や天涯孤独の身で下宿を転々としていた。彼女が下宿を移った時、必ず最初にする事は、自分の部屋の良く見える場所に伯母の写真とキリスト (Sacred Heart) の石版画を置くことだった。物語は、彼女がクイーンズ大学近くのヘンリー・ライス夫人という未亡人の下宿へやって来たところから始まる。

彼女の愛しい伯母が暖炉の真正面から彼女を見られるよう伯母の写真を配置した後、ミス・ハーンはキリストの油絵風カラー石版画を包んだ白いティッシュ・ペーパーを開いた。彼の場所はベッドの頭だった。彼の指は祝福のために上げられていた。彼の目は優しくだったが、非難するようでもあった。彼は古く、彼の頭の周りに描かれた後光は小さな裂け目を見せ始めていた。彼は長い間、彼女の人生のほとんど半分の間、彼女を見下ろし続けていた⁽²⁶⁾。

この描写にはふたつの意味が込められているような気がする。ひとつは、ジュディスは、伯

母の写真とキリストの石版画を間近に置くことにより、カトリシズムの厳守を自分に言い聞かせていること、そしてそれから救いを求めようとしていること。しかしながら、キリストの頭の周りに描かれた後光に入った「小さな裂け目」はジュディスの信仰のぐらつきを象徴しているのではないだろうか。したがって彼女にとってキリストの目は「優しく」もあり、「非難する」ようにも見えたのではないだろうか。

ジュディスがこの下宿で出会ったのが、前述のジェイムズ・マドゥンである。彼は閉鎖的なベルファーストを逃れ、自由と富を求めてアメリカへ渡った。そして、ニューヨークでホテルのドアマンをしていたが、バスにはねられる事故に会い、1万ドルの損害賠償金を得てベルファーストに戻って来て、ジュディスと同じ下宿に住む。彼女は彼のアメリカの話に魅せられ、保守的なカトリシズムの世界を逃れ、自由を求めて彼と一緒にアメリカへ行くことに憧れる。一方、マドゥンの方も、ジュディスのことを、自分の話を理解してくれる教養ある女性と感じ、ふたりはお互いに引かれ逢瀬を重ねるようになる。そして、当時、マドゥンはダブリンでレストランを開業することを目論んでおり、ジュディスの遺産を当てにして、彼女にパートナーになって欲しいと依頼する。しかし彼は、彼女がさほどの財産を持ち合わせていないと知ると、彼女に別れを宣告する。この失恋がきっかけで、ジュディスは、以前から密かにウィスキーを飲む癖があったが、「痛ましい事件」の人妻同様、酒に溺れる。彼女は教会に駆け込み、神に救いを求めようとするが神父からは無視され、絶望に陥り、特別養護施設に送られる。そして、結局、彼女は孤独のまま、保守的かつ因習的なカトリシズムの世界から逃れられないことを悟って物語は終わる。

「都会の孤独人」を描いているという点で、『ジュディス・ハーン』は『ダブリン市民』と類似の小説ではあるが、その描写法において大きな相違が見られる。ジョー・オドノヒューの『評伝ブライアン・ムーア』(1991)は、ムーアの作品を細かく分析し、デニス・サン普森の

書いた評伝とはまた違った意味で優れたムーア研究書である。その中で、彼女はジョイスとムーアの違いを次のように指摘している。

『ダブリン市民』の特徴は、思慮深さと、作者が主題からある一定の距離を置いていることであり、それがこの作品を傑作のレベルに仕立て上げている。ブライアン・ムーアの『ジュディス・ハーン』と『ルパーカルの饗宴』は、それらの疑いもなく優れた点にもかかわらず、ジョイスのレベルには決して達していない。なぜならば作者が、彼が描いている社会にあまりにも緊密に拘わり過ぎているからであり、彼の憎しみがあまりにも強烈に表現されているからである⁽²⁷⁾。

オドノヒューが指摘する通り、同じ保守的なカトリック社会に生きる「都会の孤独人」の描写でも、ジョイスの場合、彼らから一定の距離を置いて、冷静な目で客観的に描いており、作者の批判の声は聞こえてこない。それに対してムーアは、『アイスクリーム皇帝』でも見られる通り、保守的なカトリックを、彼の感情をダイレクトに表現して、批判している。そしてジョイスの描く都会の孤独人は、カトリックの因習に捕らわれて生きているとはいえ、ある種の「救い」が感じられるが、ムーアの描く都会の孤独人には決してそれは感じられない。オドノヒューの別の指摘を紹介しよう。

ムーア自身……「平凡なるものの賛美」(celebration of the commonplace) 故にジョイスを賞賛すると述べた時、恐らくジョイスと彼の本質的な違いを言ったのだろう。『ジュディス・ハーン』と『ルパーカルの饗宴』には、そのことばのいかなる意味においても、“celebration” はほとんどない⁽²⁸⁾。

例えば、ジョイスの「痛ましい事件」における「救い」に関してだが、事故死した人妻にとってみれば悲劇であったが、主人公のジェイムズ・ダフィーにとっては、「人妻」と別れたこ

とは彼の人生を悲劇に導かないための「救い」であったといえよう。また、オドノヒューはダフィーの生き方を“grimly selective”、ジュディスの生き方を“grimly unselective”⁽²⁹⁾と呼んで区別しているが、的を射た対照法である。孤独という意味ではダフィーは暗いが、彼の場合、自分の生き方が選択できる。孤独にしても、無神論にしても彼が選んだ生き方であり、周囲の環境に呑み込まれるということはない。この点、「平凡なるものの賛美」ともいえよう。それに対してジュディスの場合、決して孤独は好き好んで選んだものではなく、保守的なカトリックから逃れようにも逃れることができず、自分の生き方の選択はできず、環境の犠牲者となってしまう。

また、『ジュディス・ハーン』の中で、ムーアが「憎しみ」の感情を込めて批判している因習のカトリックの体現者が、ジュディスの苦難にまったく耳を貸さないクイグリー神父である。彼は映画やドッグ・レースといったほとんどの娯楽を道徳的悪として否定し、教区民たちにカトリックの教えに従うことを強要する。ジュディスは孤独を紛らすために酒を飲み始め、救いを求めて彼のもとにやって来て、告解を行うが、この時の彼の彼女への対応がその因習のカトリックを端的に表現している。

彼女は神父の顔を見ていた。それは飽き飽きした顔で、頬杖をつき、目は閉じていた。彼は聞いてくれない。彼女は心で泣いた。聞いてくれない!

彼は話し始めた。「よいか、我が子よ。私たちは皆、この世の中で課せられた重荷を、耐えねばならぬ十字架を、我らの神に捧げるべき試練と苦難を背負っている。そして祈りこそが偉大なものだ、我が子よ。私たちは、話を聞いてくれる神がいる故に、決して孤独であるはずがない……私たちが必要なのは、ただ祈ることだ。我が子よ、祈りなさい。これらの誘惑と戦うために神の助けを求めなさい」⁽³⁰⁾

確かに、同じカトリシズムの因習性を描くにしても、ジョイスに比べ客観性、冷静さを欠いたために、ムーアはジョイスほどの世界的作家になれなかったのかもしれないが、オドノヒューの言う、ムーアの小説の「疑いもなく優れた点」について述べてみたい。それは彼のリアリズムとナラティブの技法である。たとえば、「痛ましい事件」の場合、ジョイスはダフィーに捨てられた人妻を列車事故で死亡させてしまうが、ムーアはジュディスを生かしたままにしておく。ムーアは、たとえ彼女は人生に失望しようと、因習的なカトリシズムの中で生き続けねばならないという冷酷な現実を突きつける。そして彼の優れたナラティブの技法が、彼のリアリズムをさらに際立たせている。前述したように、この作品は、ジュディスが新しい下宿に移って来て、伯母の写真とキリストの石版画を自分の部屋に固定するシーンから始まるが、結末も、特別養護施設に収容された彼女が自分の個室にこのふたつを看護婦に手伝ってもらって据え付けるシーンで終わる。

そして化粧台にはセピア調の彼女の伯母がいる。伯母のダーシーの写真が。実際の伯母よりもリアルだ。なぜならば伯母は死んでいないから。それはまさにここにある。それは私の一部だ。

そして神よ。あなたはかつていたのだろうか。この絵はただ単に、神よ、あなたなのだろうか。それはここにあるが、あなたは行ってしまっていない。私はあなただ。あなたが誰であろうとその絵はやはり私の一部だ。

彼女は目を閉じた。それらふたつのことを考えるとおかしかった。それらが私といつしよにいて、私を見下ろしている限り、新しい場所が私の家となる⁽³¹⁾。

これはジュディスが因習的なカトリシズムから逃れられないことを示唆する象徴的な結末である。伯母は死んでしまったが、伯母の写真は彼女の「一部」となっている。これは伯母から受け継いだカトリシズムが彼女の精神に染み付

いて離れなくなっていることを暗示しているようだ。そして神が「かつていたのだろうか」、神の絵は「ただ単にあなたなのだろうか」というジュディスの疑問は、彼女を決して救ってくれなかった神に対する疑問と、彼女が一時的にカトリシズムを放棄しようとしたことを示唆しているのではないだろうか。神は「行ってしまっていない」が、神の絵はやはり彼女の「一部」だ、そして伯母の写真と神の絵が彼女と共にある限りは新しい場所が彼女の「家」だという感慨は、神は彼女を救ってくれはしなかったが、彼女は決して因習的なカトリシズムから逃れられないという諦めの気持ちを表現していると思われる。比喻表現を効果的に用いたムーアのナラティブが、ジュディスのこれらの感情をよりリアルに露呈していると言えよう。

『沈黙の偽り』に描かれた北アイルランド紛争

ムーアのナラティブの技法の真価が発揮されているのが、『アイリーン・ヒューズの誘惑』(1981)、そしてこれから論じる『沈黙の偽り』といったスリラー小説である。前者は、アイリーン・ヒューズという北アイルランドの田舎町出身の純情無垢な娘が、彼女の雇い主夫妻とともにロンドンへ休暇に出かけ、そこで展開するスリラーである。一見裕福で幸福そうなこの夫妻の仲は、実は崩壊状態で、夫はアイリーンを異常なまでに、神と崇めるまでに愛し、彼自身と、彼の築いた百貨店を破滅に導く悲劇的結末を迎える。作品のタイトルは皮肉である。純情無垢なアイリーン・ヒューズは雇い主夫妻の夫の方を誘惑するような行為は何ひとつしない。しかし彼は、彼が神々しいと崇める彼女の美しさに「誘惑」され破滅への道をたどる。このタイトルひとつを取っても、ムーアのナラティブの特長が現れていると言えよう。ただし、この作品は、映画『死にいく者への祈り』(1987)や『クライング・ゲーム』(1992)同様、北アイルランドに住む人間を主人公にしているとはいえ、主な舞台はロンドンであり、決して北アイルランド紛争が主題ではないので、拙稿での

論述は割愛したい。

『沈黙の偽り』は、ムーアが北アイルランド紛争に真正面から怒りをぶつけ、カトリック、プロテスタント双方の急進派を批判した小説である。デニス・サンプソンによれば、彼がこの作品のヒントを得たのは、1987年、ベルファースト・クイーンズ大学から名誉学位を授かるために帰郷して大学近くのホテルに宿泊した時、真夜中に爆破の脅迫があり外への避難を命ぜられたという出来事からである⁽³²⁾。作品の主人公マイケル・ディロンはベルファーストのホテルの支配人である。彼のホテルに、カナダの、プロテスタントの急進派組織であるオレンジ協会の指導者が宿泊しており、彼の演説会が催されることになっていた。カトリックの過激派テロ組織IRAは彼の殺害をたくらみ、ディロンの自宅に侵入して彼と妻を監禁し、妻を人質に取っている間にホテルを爆破するようディロンに命じる。IRAは、ディロンが警察に通報したら彼の妻を殺すと脅迫する。彼は、妻の命と多数のホテルの宿泊客の命どちらが大事かと激しく葛藤した揚げ句、警察への通報を決断する。ホテルは爆発したが、宿泊客は無事で、幸い彼の妻も一命を取りとめる。しかし、当時彼にはBBCテレビに勤める愛人がいて、彼の妻は、もし人質が自分ではなくて彼の愛人だったら警察には通報しなかったでしょう、と彼を激しく非難する。ディロンは監禁されていた時、IRAのうちのひとりがたまたま覆面を外した瞬間に彼の顔を見ていた。彼は、IRAに自分の命が狙われることを顧みずに、警察にその人相を告げるべきかどうか、再び激しい心理的葛藤を繰り返す。彼はロンドンの愛人の元に行く。そしてこの作品は、イギリスの女流小説家アンタ・ブルックナーが、「まったくショッキングで、手から放すことができなくなる」⁽³³⁾と評する展開と結末を見せる。

『沈黙の偽り』という作品のタイトルは、IRAに監禁されたディロンが、家の中から、近くに住むハービンソンという銀行を定年退職した男性が犬の散歩をさせているのを見ながら、北アイルランドの現状に対して次のような怒り

を表明するパラグラフの中から取られている。

そして、今、彼が犬と一緒に朝の散歩に出かけるのを見ながら、ディロンは自分のうちに怒りが沸き起こるのを覚えた。この、自分とハービンソン氏の生まれ故郷を頑迷と不正の末期症状の病気に陥れた偽りに対して。何年もの間、貧しいプロテスタント労働者たちに対して語られてきたカトリック教徒に関する偽りに対して。貧しいカトリック労働者たちに対して語られてきたプロテスタント教徒に関する偽りに対して。議会、演壇、決起集会、追悼演説で述べられてきた偽りに対して。そして何よりも、アルスターの現状の不正から顔を背けてきたウェストミンスター連中の沈黙の偽りに対して⁽³⁴⁾。

このように、ムーアはプロテスタント、カトリック双方の急進派に対して、そしてイギリス議会に対して怒りをぶつけているが、彼はカトリック・ナショナリスト側に対してより大きな批判を向けているふしがある。それは、作者が、ディロン夫妻はカトリックでありながらカトリック系の過激派組織IRAに脅迫されるという皮肉な設定にしているということ、そしてディロンに北アイルランドに対して次のような思いを抱かせているということから推測される。ひとつは、彼が愛人に会いに行くために車を走らせ、周辺の光景を見ながら、北アイルランドはイギリスに属しているからこそより豊かなのだという思いを抱く点だ。

ベルファーストとルーガンを結ぶ自動車道は良く設計され、道路標識が行き届いており、この高速道路からは、時たま、新しい工場や、良く耕作された農地の中に建つきれいな農家が見えた。それは、アイルランドのこの部分はイギリスの一部であり、その道路、公共サービスは、南へ100マイルも行かないアイルランド共和国のそれらよりも遥かに優れていることを思い起こさせるものだった⁽³⁵⁾。

もうひとつは、彼が、覆面を外したIRAのひとりの顔について、命を賭してでも警察に証言すべきかどうか激しく葛藤する際に抱く思いだ。

北アイルランドはナチス占領下のフランスのような被支配国とは違う。住民の大多数はイギリスに残留することを望んでいる。命の危険を冒す理由などどこにもない⁽³⁶⁾。

因習的カトリシズム、偽善的ナショナリズムを嫌悪してアイルランドを捨てたムーアの人生を振り返った時、そして『ジュディス・ハーン』、『ルパーカルの饗宴』、『アイスクリーム皇帝』等、北アイルランドを題材とした彼の他の作品を考えた時、このディオンの思いは作者の思いの一部を代弁していると言っても差し支えないだろう。

またムーアは、この作品執筆の動機について、出版された年の1990年、イーモン・ウォールとのインタビューのうちで、「(テロリストから解放された)人質のインタビューや言葉を聞くことはまずない。それが私が興味を持った沈黙だ」⁽³⁷⁾と述べている。したがってこの作品に描かれた「沈黙の偽り」は、「ウェストミンスター」の連中の沈黙の偽り」だけではない。ディオンの、幾多の場面における心の葛藤は「沈黙の偽り」を押し通すかどうかの葛藤である。IRAから彼のホテルを爆破するよう脅迫された時、彼は爆破直前になって「沈黙の偽り」を破り、警察に通報することにより多数の宿泊客の命を救う。そして、警察から、彼が目撃した覆面IRAのひとりの顔について証言を求められた時、彼は命を賭してでも証言すべきかどうか、つまりここでも「沈黙の偽り」を破るべきかどうか激しく葛藤する。さらに、この作品の中で「沈黙の偽り」を巡っての行動の選択を迫られるのはディオンだけではない。彼の妻は、彼が彼女の命も顧みずホテルに仕掛けられた爆弾のことを警察に通報した面当てに、テレビに出演して、「沈黙の偽り」を破り、IRAを糾弾する。しかし彼女は、ディオンの覆面IRAの人

相について警察への証言を決意した時、それを撤回することを、すなわち「沈黙の偽り」を押し通すことを懇願する。彼の愛人もまた彼に同じことを懇願する。そしてまた、この作品のうちには自ら進んで「沈黙の偽り」を選択する人間たちがいる。それは、周囲には一切探知されずディオンの家に侵入し、彼らを監禁するIRAであり、結末で、ディオンと彼の愛人が借りているロンドンのアパートの一室にガス・メーターの計測と称してやって来た男と連れれのふたりである。ムーアの、フラットで、癖のない、流れるような英語を用いたナラティブは読者を作品世界の中に吸い込み、アニタ・ブルックナーの言う通り、この本を「手から放すことができなくなる」状態に陥れる。

ムーアはやはりイーモン・ウォールに、「私は、北アイルランドに関心を持っていない人々でも読む気になる本を書きたかったのです。なぜならば、北アイルランドについて書かれる大部分の本は今や専門家のみによって書かれており、世界中のほとんどの人々は辟易しているからです」⁽³⁸⁾と述べている。確かにこの小説は、ムーアの優れたナラティブにより北アイルランドに特別な関心を持たない読者でも興味深く読むことができる。そしてこの紛争の実態をかいま見ることができる。筆者は、前に、ムーアはジョイスに比べれば劣ると述べたが、アイルランドにはジョイスを凌ぐ小説家はひとりもないし、これからも出てこない可能性は大きい。ムーアは、ジョイスに次ぐ、アイルランドを代表する小説家たちのうちのひとりであると筆者は思っており、今後は、彼のナラティブの技法をさらに理論的に分析し、その優秀性を実証するのが研究課題である。

おわりに

ムーアの人生と彼の小説を振り返ってみた時、北アイルランドに生まれた人間がナショナリズムを支持するか、ユニオニズムを支持するかは、その人の個人的体験にかなり左右されることが分かる。ムーアが生まれた1921年はイギ

リス＝アイルランド条約が締結され、翌年には南の26州から成るアイルランド自由国が誕生し、北の6州は北アイルランドとしてイギリスに残留する。この時期、北の6州ではイギリスへの残留を主張するユニオニストと、イギリスからの独立と南北統一を主張するナショナリストの間で激しい紛争が起き、約300人の住民が亡くなる。この騒乱の余波はその後も続き、1935年には再び大きな紛争が起こる。ムーアは、このような激しい宗派対立の中で子供時代を過ごすわけだが、彼及び彼の家族が紛争に巻き込まれて被害を受けたという形跡がなく、ムーアの注意はもっぱら、家庭内での、そして学校での因習的カトリシズムに向けられる。もし仮にムーア自身、あるいは家族がプロテスタント教徒から攻撃を受け被害に遇うということがあれば、事情は全く異なっていただろう。

第三者の目で北アイルランドを判断すればどうか。アイルランドというひとつの島が南北に分断されているのは民族の悲劇という見方が、世界の主流見解である。アイルランド人の祖先はケルト人であり、したがってアイルランドはケルト人による統一国家であるべきだというのが一般論である。しかし、ケルト人の歴史を振り返って見ると、彼らはもともとヨーロッパ大陸で誕生し、好戦的民族として大陸各地を荒らし回ったが、ローマ帝国との民族闘争に敗れ、アイルランド、スコットランド、ウェールズ周辺に生き延び、特にアイルランドでは先住民を追い払い、全土に住みつくこととなった。A.T.Q.スチュアートは、北アイルランド問題の歴史書として幅広く読まれている彼の名著、『狭い土地—アルスターの諸相、1609年から1969年—』のうちで、アイルランドはヨーロッパの複合民族から成っており、ケルト人による統一国家である必然性はないと強調する。

アイルランド人は数多くのヨーロッパ民族の混合であるということを示すのは、イングランド人やスコットランド人にとってもそうだが、国家を目指すうえでなんら有害なことではない。どうして有害でありえようか。そし

てこの混合は史実の記述とともに始まっているのではなく、先史時代から始まっているという事実は強調すべき必要がある。ゲール人自体侵略者であった⁽³⁹⁾。

しかし、スチュアートの指摘、そして筆者の指摘にも問題がないわけではない。確かにケルト人以前にアイルランドには先住民がいたが、それはスチュアートも述べているように「先史時代」のことであり、その民族名も定かではない。そのような民族をアイルランド人の祖先とみなして、ケルト人を「侵略者」と決めつけることは果たして妥当であろうか。もし一般説のようにケルト人をアイルランド人の祖先と見なすならば、アイルランドはひとつの国家であるべきで、ナショナリズムが正当である。しかし、スチュアートの主張を認めるならば、ユニオニズムが正当性を帯びてくる。1988年、ロイ・フォスターは、スチュアートの流れを汲んで、『現代アイルランド—1600年から1972年—』のうちで、アイルランドの「歴史修正主義」(Revisionism)を提唱し、一世を風靡した。彼は、「アイリッシュネスの多様性」(Varieties of Irishness)⁽⁴⁰⁾ということを主張し、カトリック・ナショナリストたちを「排他的」であると糾弾した。これはカトリシズムの因習性、ナショナリズムの偏狭性を批判したムーアに通ずるものがある。

このようにナショナリズム、ユニオニズム双方に正当性が認められる。また、1998年、北アイルランド首相でユニオニストのデイヴィッド・トリンブルと、社会民主労働党党首でナショナリストのジョン・ヒュームがノーベル平和賞を受賞したことも双方の正当性が認められた証拠である。しかし、それ故に北アイルランド問題の解決は難しいとも言えよう。冒頭に、筆者は、北アイルランドの小説家たちがどのように北アイルランド問題の「融和」、「解決」の方法を示しているかを探るのが筆者の研究課題であると書いた。ムーアの場合、個人的体験に基づいて、アイルランドのナショナリズム、カトリシズムが必ずしも正しくないことを示すことにより、

そして同時に北アイルランドにおける宗派紛争の愚劣さを糾弾することにより、北アイルランドがイギリスに残留する形で両宗派の融和を訴えているように思える。

ムーアの小説のもうひとつの大きな価値は、生涯発表した20編の作品が、それぞれに異なる特徴を備えていることである。たとえば拙稿で論じてきた3つの作品に関しても、いずれも北アイルランドを描いているとはいえ、『ジュディス・ハーン』はひとりの女性の人生を通して因習のカトリシズムを批判したもの、『アイスクリム皇帝』は第2次世界大戦下のベルファーストに暮らす住民の描写を通して偽善的ナショナリズムを批判したもの、『沈黙の偽り』は現代の北アイルランド紛争を真正面から描いたものと、それぞれが他とは際立った特徴を見せている。ムーアは、デニス・ Sampson とのインタビューにおいて、「本のサイン会の時、誰かが私に近づいて来て、『ムーアさん、私はあなたの本を全部読みました』と言う度に私は驚きます。私は、心の中ではそれぞれの作品が全く異なると思っていますので、私が書いてきた異なる種類の作品すべてに興味を持つ人がいるということが考えられません」⁽⁴¹⁾と語っている。ムーアの作品はそれぞれに異なっているからこそ、読者にとっては面白いのである。南北アイルランド、フランス、アメリカ、カナダ、アフリカ等世界中を舞台としたムーアの作品は、その優れたナラティブの技法が生み出す強烈なリアリズム故に読者を引きつけるのである。ムーアが亡くなる直前に出版された Sampson のムーア評伝は、今までに出版された彼の研究書のうちではもっとも優れているとの評判だが、そのタイトル、『ブライアン・ムーア—カメレオン小説家—』もこの上なく的を射たタイトルと言えよう。

Mara という匿名で出版)、*A Bullet for My Lady* (1955, 同)、*This Gun for Gloria* (1956, 同)、*Intent to Kill* (1956, Michael Bryan という匿名で出版)、*Murder in Majorca* (1957, 同) の7編は、ムーアが金儲けのために書いたスリラーで、通常、文学作品として扱われていない。

- (2) 日本では、1990年に、*The Color of Blood* (1987) が『夜の国の逃亡者』(大庭忠男訳)、1998年に、*Catholics* (1972) が『独裁者の島』(田中昌太郎訳) というタイトルで共に早川書房から出版されただけである。
- (3) Denis Sampson, *Brian Moore: The Chameleon Novelist* (Dublin: Marino, 1998), p.14.
- (4) ムーアは、「私のうちにはふたつのアイルランドの血が流れている。私の母はアイルランド人のうちではもっともアイルランド的だったが、私の父はある程度までアルスターのプロテスタントの血を受け継いでいた」と語っている。("Beginnings," *Today*, 11 October 1980, 3, quoted by Sampson, p.16.)
- (5) John Eoin McNeill (1867-1945) 穏健派ナショナリストであった彼は、1916年のイースター蜂起における武力闘争には反対した。ムーアは、父親や彼のナショナリズムに反対していたが、後にマックニールのことを、「無益な流血の空しさ、愚かさに酔うことのなかった冷徹で現実的な思想家であった」と賞賛している。("Review of Michael Tierney, *Eoin MacNeill*," *Times Literary Supplement*, 31 July 1981, p.869, quoted by Sampson, p.27.)
- (6) "Bloody Ulster: An Irishman's Lament," *Atlantic Monthly*, September 1970, p.59, quoted by Sampson, p.23.
- (7) "Brian Moore in conversation with Rosemary Harthill," Rosemary Harthill, *Writers Revealed: Eight Contemporary Novelists Talk about Faith, Religion and God* (New York: Peter Bedrick, 1989), p.137, quoted by Sampson, p.30-31.
- (8) "Preliminary Pages For a Work of Revenge," *The Dolmen Miscellany of Irish Writing*, ed., by Thomas Kinsella and John Montague (Dublin: Dolemen, 1962), rpt., Brian Moore, *Two Stories* (Northridge: Santa Susana, 1978), pp.13-15, quoted by Sampson, pp.31-32.
- (9) "Interview with Hallvard Gahlie," 12 June 1967,

註

(1) *Wreath for a Read Head* (1951, のちに *Sailor's Leave* と改題)、*The Executioners* (1951)、*French for Murder* (1954, Bernard

- Tamarack Review*, 46, Winter1968, p.8, quoted by Sampson, p.38.
- (10) Brian Moore, *The Emperor of Ice-Cream* (1965, rpt., London: Paladin, 1987) , p.35.
- (11) "Eileen Battersby Talks to Brian Moore," *Irish Times*, 12 October 1995, p.13, quoted by Sampson, p.288.
- (12) *The Emperor of Ice-Cream*, pp.35-36.
- (13) *Ibid.*, pp.36-37.
- (14) Richard B. Sale, "An Interview with Brian Moore," 13 July 1967, *Studies in the Novel* (Spring 1969) , p.68, quoted by Sampson, p.39.
- (15) *The Emperor of Ice-Cream*, p.217.
- (16) *Ibid.*, p.252.
- (17) Letter to Rory Fitzpatrick, 23 January 1966, quoted by Sampson, p.151.
- (18) Brian Moore, *The Lonely Passion of Judith Hearne* (1955, rpt., London: Flamingo, 1994) , pp.44-45.
- (19) Brian Moore, *Lies of Silence* (1990, rpt., London: Bloomsbury, 1995) , p.198.
- (20) *The Emperor of Ice-Cream*, p.234.
- (21) "Old Father, Old Artificer," *Irish University Review*, 12:1 (1982) , pp.13-14, quoted by Sampson, pp.42-43.
- (22) *Ibid.*, p.15, quoted by Sampson, p.88.
- (23) Sampson, p.88. メイヴィス・ギャラント (Mavis Gallant, 1922-) はカナダの女流小説家。 *A Fairly Good Time* (1970) 等の作品がある。
- (24) "Brian Moore in Conversation with Tom Adair," *Linen Hall Review* 2:4, Winter 1985, p.5, quoted by Sampson, p.89.
- (25) James Joyce, *Dubliners* (1914, rpt., Harmondsworth: Penguin, 1967) のうちの "A Painful Case" (pp.105-106) を参照した。
- (26) *The Lonely Passion of Judith Hearne*, p.7.
- (27) Jo O'Donoghue, *Brian Moore: A Critical Study* (Montreal: McGill-Queen's University, 1991) , pp.27-28.
- (28) *Ibid.*, p.27.
- (29) *Ibid.*
- (30) *The Lonely Passion of Judith Hearne*, p.197.
- (31) *Ibid.*, pp.254-255.
- (32) Interview with Eamonn Wall, unpublished, 1990, quoted by Sampson, p.276.
- (33) "It is profoundly shocking and it is impossible to put down," *Spectator*, *Lies of Silence* 裏表紙。
- (34) *Lies of Silence*, pp.54-55.
- (35) *Ibid.*, p.105.
- (36) *Ibid.*, p.198.
- (37) Interview with Eamonn Wall, quoted by Sampson, p.276.
- (38) *Ibid.*
- (39) A.T.Q. Stewart, *The Narrow Ground: Aspects of Ulster 1609-1969* (1977, rpt., Belfast: Blackstaff, 1997) , p.28.
- (40) R.F. Foster, "Varieties of Irishness," *Modern Ireland 1600-1972* (1988, rpt., Harmondsworth: Penguin, 1989) , pp.3-14.
- (41) Sampson, p.5.

拙稿は、日本英文学会九州支部第52回大会における同名タイトルの研究発表（1999年10月30日、大分大学）の原稿に修正、加筆を施したものである。同時に平成11年度日本学術振興会科学研究費助成による研究成果の一部である。